AG5だより

日本人学校・補習授業校を応援します！

在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業（https://ag-5.jp）

「日本人学校における高度グローバル人材の基礎的資質形成のためのプログラム開発」の5年間を振り返る

ＡＧ５運営指導委員・海外子女教育振興財団 教育相談員 植野美穂

ＡＧ５プロジェクトが開始した2017年度、テーマ「日本人学校における高度グローバル人材の基礎的資質形成のためのプログラム開発とそのための教員研修のプログラム開発」の研究提携校は香港日本人学校香港校小学部の１校でしたが、2019年度からシンガポール日本人学校とパリ日本人学校が加わり、探究学習のプログラム開発とそのための教員研修に取り組んできました。今月号では、これまでの５年間の実践について振り返ってみます。

「日本人学校における高度グローバル人材の基礎的資質形成のためのプログラム開発とそのための教員研修のプログラム開発」のこれまでの活動

（一）香港日本人学校香港校

香港日本人学校香港校小学部では、二〇一六年度に「グローバルクラス」を立ち上げ、広い視野、論理的思考力、適応力、自己表現力などのグローバル型能力と英語力を兼ね備えた人材を育成するための実践に取り組んできました。

「グローバルクラス」は、小学四・五・六年生を対象とし、各学年の学級担任は日本人と英語のネイティブスピーカー教員の二人体制で、日常的に英語に触れることが可能な環境となっています。

このクラスでは、英語の授業を三人の教員で担当していることを生かして、児童の英語力に合わせたグループレッスン（ワーク）を多く取り入れ、英語以外にも算数、理科、図工は英語で学び、英語力向上に向けた取り組みを行っていることが特徴です。

また探究学習を核にした「グローバルスタディーズ」の取り組みも、「グローバルクラス」の特徴です。「グローバルスタディーズ」は、「国際バカロレア（IB）」のレッスンプランである「探究の単元」（Unit of Inquiry）を参考にした探究サイクルを学習過程の柱にし、各教科、特に社会科と指導内容を関連させながら、世界的な課題について学期に一つのトピックで探究学習を行い、調査力、分析力、論理力、プレゼンテーション力などの能力を高め、グローバル市民としての主体性を育むことを目標としています。

学年にまたがる単元構成、評価法、指導法の見直し等、「グローバルスタディーズ」のプログラムの改善と開発を毎年行い、一九年度にはこれまでの研究の成果をまとめて「グローバルスタディーズ単元デザインの手引き」を作成しました。

教員の入れ替わりが頻繁な日本人学校にとって、学校独自の科目の質を維持・向上することは大きな課題です。

そこで、新しく赴任してきた先生が「グローバル・スタディーズとはどのようなものか」、「何を大切にしているのか」、「どう展開していくのか」を理解して担当できるように、学年・学期ごとの「カリキュラムマップ」も作成しました。

二〇年度には、四年から六年までのそれぞれの学年で、探究学習を通してどこまで調査力やプレゼンテーション力等の力（スキル）を身に付けさせていくのか、評価法について検討し、「グローバル・スタディーズの評価のためのＡＴＬ（Approach to Learning：学習のアプローチ方法）スキルをもとにしたルーブリック指標」を作成しました。

探究学習では、教員の主観的な評価に陥らないように評価基準を明確に示すことが大切ですが、学年に沿ったルーブリック指標を作成することで、目標とする児童の姿が明確になり、系統的な指導の実現が可能になりました。

またルーブリック指標を事前に児童に示すことで、「これからどのような学習をするのか、何を目指して探究をまとめていけばよいのか」、子どもたちの自己評価につなげられるようになりました。

香港日本人学校香港校の中学部では、総合的な学習の時間を活用して「探究学習」の単元開発に取り組んでいます。また、English Aクラスの授業でも「リサーチペーパー（レポート）の作成と発表」を通して、思考力、判断力、表現力を高めています。

二〇年度はコロナの影響で予定していた活動が行えませんでしたが、年度後半には前年度の教員研修をもとに、「探究学習」に生かせる反転学

習に積極的に取り組みました。またICT機器を活用して、香港の日本語学科の大学生に、中一では「香港ガイドブックづくり」、中二では「香港の中の日本」についてリサーチしたことを発表し、意見交換を行いました。

(二)シンガポール日本人学校クレメンティ校・同校チャンギ校

シンガポール日本人学校では、総合的な学習の時間に、「シンガポール」という国・地域を題材として、特色ある現地理解教育の実践を行ってきました。

一八年度に「持続可能な未来社会を実現するための探究力の育成」を重点課題の一つに掲げる「シンガポール日本人学校グローバル人材育成大綱」が策定・施行され、これまでの総合的な学習の時間を、小学部では「探究科基礎」、中学部では「探究科」と改称し、現地理解教育を中心に「持続可能な社会のための教育(ESD)」の視点を取り入れた探究学習を推進するようになりました。

またAG5の提携校となった一九年度からIBの要素を取り入れて、シンガポールが抱える子どもにとっての身近な問題を切り口に、地球上で起きているさまざまな課題を解決することの重要性について認識させ、課題の解決につながる価値観や行動などの変容をもたらす研究を進めています。

二〇年度は、コロナ感染の影響で四月よりシンガポールはロックダウン状態となり、学校も閉鎖されました。シンガポール日本人学校ではオンライン授業体制の構築と開発に全ての時間を注ぎ、AG5の研究は一時停止せざるを得なく、八月に研究を再開しました。

児童の通常登校が開始された後も、学校現場を取り巻く環境がロックダウン以前の姿に戻る目途は立たず、従来型の授業形態、学校行事、校外学習の実施は困難な状況になったため、探究学習のカリキュラムには全内容を練り直す必要が生まれました。

クレメンティ校ではロックダウン中に培った「在宅オンライン授業」を生かし、各学年の教師が校外学習に行く予定だった施設に赴き、音声解説も交えた動画を作成したほか、ゲストティーチャーが出演する動画も用意してオンライン授業で活用し、校外学習と同等の効果を上げられる実践を行うことができました。

また在宅という強みを生かし、家庭やその周辺での臨地調査をオンライン授業で行い、探究的な学びの実践の幅を広げたほか、オンライン授業を互いの成果発表の場として活用することで、学級・学年の垣根を越えた交流が活発になりました。

さらに十月から十一月にかけて、国内の研究協力校である東京学芸大学附属大泉小学校とクレメンティ校とで、住んでいる互いの地域を比べ、共通するよさやちがいを見つけることをねらいとした探究に関する交流学習を行いました。

時差や学習進度の関係で日程調整が難しいという課題がありますが、各学校の児童の発表は事前に動画撮影をしておき、空いている時間に視聴することで多くの時間を交流に充て、互いの発表を通して比較しながらよさやちがいを見つけることができました。

IBの視点を取り入れて探究学習のカリキュラムを構築するには、全教員がIBプログラムについて理解する必要があります。チャンギ校では、IBのPYP認定校の先生を講師に招き、「大人の探究」のプログラムを全七回オンラインで受けました。

このプログラムでは、前半は学習者として、後半は授業者として参加することで、学び手である子どもが直面するであろう「つまずき」や「悩み」を実感することができました。研修を受けたことで、PYPでは「具体と抽象の往復」を繰り返しながら高度な概念理解を図っていることを体験的に理解でき、教師自身が物事を抽象化する思考力を鍛える必要があることに気付くこともできました。

(三)パリ日本人学校

パリ日本人学校では、「世界で活躍するグローバル人材の育成」を研究主題に設定し、①本校におけるグローバル人材育成に必要な資質・能力 ②探究単元の開発推進のための対話的で深い学びの実現と学級づくり ③単元づくり(探究単元)のためのカリキュラムマネジメント ④汎用性のある小中一貫探究単元の開発(IBの理念を参考)を研究の柱として、一九年度から探究学習のカリキュラム開発に取り組んできました。

初年度には、汎用性のある小中一貫探究単元の開発に向けて、小学部では「水」を、中学部では自己の生き方を考えるために「フランスと私」をテーマとする探究学習に取り組みました。

二〇年度はコロナ禍によりパリ日本人学校も学校閉鎖となり、当初予定していた授業実践ができなくなったため、学習支援企画として日本国内の五つの研究機関〈情報通信研究機構(NICT)、宇宙航空研究開

発機構（ＪＡＸＡ）、新エネルギー・産業技術総合開発機構（ＮＥＤＯ）、科学技術振興機構（ＪＳＴ）、日本原子力研究開発機構（ＪＡＥＡ）によるオンライン講座「科学を知ろう～今と科学とわたしと未来～」をもとに探究学習を行いました。

オンライン講座を聞いてメモしたことをもとに、子どもたちは「学びの地図」や「新聞」を作成し、グループ交流・学級交流・ブロック学年交流などの「新聞交流会」を通して再度自身の考えを深め、「提言書」を作成しました。「パリ日提言フォーラム」では、全学年・保護者・各研究機構の方々に向けて、根拠を明確にしながら自分の考えを発表しました。

ＩＢの学習者像を具体の実践で育成すべき資質・能力にしたものとして「二十一世紀型スキル」が世界各国で注目されていますが、パリ日本人学校の実践は、まさに「二十一世紀型スキル」の育成を図っており、それがグローバル人材の育成につながるようになっています。

今年度は、次期オリンピック・パラリンピックの開催地がパリであることを見据えて、「今とオリパラとわたしと未来」をテーマに、「二十一世紀型スキル」の育成を目指した探究学習のカリキュラム開発、授業実践を進めます。

『日本人学校における「探究学習」のすすめ～実践ガイドブック』

これまでの「探究学習」の実践を他の日本人学校でも広く活用できるようにするために、昨年度、探究学習とは具体的にどのようなものなのかを示した解説書として、『日本人学校における「探究学習」のすすめ～実践ガイドブック　第１部理論編』という小冊子を作成しました。

この小冊子の内容は次の五つの章に分かれており、「探究学習」の基本的な概念や考え方が詳しく紹介されています。

第１章　なぜ「探究学習」なのか
第２章　「探究学習」とは
第３章　日本人学校で探究学習を行うメリット・デメリット
第４章　「探究学習」の評価
第５章　「探究学習」の具体的手順（授業の作り方）小学校編

なお、この『日本人学校における「探究学習」のすすめ～実践ガイドブック　第１部理論編』は、ＡＧ５のウェブサイトにも掲載していますので、ご参照ください。

https://ag-5.jp/report/theme1/study/detail/138

今年度は、第１部理論編をもとにして、これまでのＡＧ５の研究提携校の実践を紹介する『日本人学校における「探究学習」のすすめ～実践ガイドブック　第２部実践編』を作成します。

第２部実践編では、香港、シンガポール、パリの各日本人学校の探究学習構想、子どもの問いの生成の様子や反応を記した授業記録、探究学習を進めていくための教員研修・組織づくりを紹介する他、第１部理論編の内容が各学校の実践でどのように反映されているかを解説します。

『日本人学校における「探究学習」のすすめ～実践ガイドブック』の第１部と第２部を合わせて読むことで、これからの教育の中核として、日本国内はもとより世界各国で求められている探究学習の考え方、学習スキルを育成する探究学習の授業づくりのヒントが得られます。

両冊子が国内外の多くの先生に活用されることを期待しています。なお第２部実践編も、ＡＧ５のウェブサイトで公開する予定です。

今後に向けて

香港、シンガポール、パリの日本人学校の先生方は、探究学習のカリキュラム開発を進めるための研究に意欲的に取り組まれ、探究学習の指導に関するスキルを高めるとともに、他の学校の実践にも役立つプログラムを開発しました。

それぞれの日本人学校で扱う探究学習の学習題材・トピックは学校ごとに違いますが、香港日本人学校の呼びかけで昨年十二月に香港とシンガポールで探究学習に関する情報交換会を開きました。

今後も、このような学校間の情報交換会を通して、他校の先生から教材や指導に関して有益なヒントをもらったり、探究学習のカリキュラム・デザインの諸課題を検討したりすることが望まれます。

ＡＧ５が終了してからも、日本人学校と国内の学校等が継続的に連携し、探究学習を普及させるための教員研修及び授業実践が進められるよう、仕組みを構築していきたいと考えています。

『「探究学習」のすすめ』